

2015年5月19日・20日と、一般社団法人ときの羽根は、ミラノ万博 日本館イベント広場に公式参加した。

「ミラノから未来へ」愛知・上海万博、COP10、ESD ユネスコ世界会議から繋ぐ「生物多様性保全活動の進化と市民連携を目指して」をテーマに、2015年ミラノ国際博覧会・日本館イベント広場に公式参加し、プログラムを予定通り実施した。

一般社団法人ときの羽根は2009年11月に設立したスタッフ3名の小さな団体であるが、トヨタ環境活動助成プログラム、経団連自然保護基金、JST さくらサイエンスプランはじめ企業・団体、個人の皆様の力強いご支援のもと、2010年の上海万博国連パビリオンで開催された「上海崇明生態国際フォーラム」での上海市政府との合作調印を機にCOP10への上海市政府代表団の公式参加をフォローし、2012年から上海市・崇明島での「自然がっこう」プログラムを毎年実施している。2014年ESD ユネスコ世界会議では日中合同で環境教育事業の成果報告と、新規に長江流域生物多様性保全活動をスタートさせることで合意した上海市・四川省・安徽省等と調印した。

愛知万博、上海万博、COP10、ESD ユネスコ世界会議と繋いだ日中合作「環境教育」活動が評価され、ミラノ万博日本館の大きな舞台上、長江上流域拠点から参加者を招いて長江流域生物多様性保全活動に関するシンポジウムを実施し、本年秋開催予定の長江流域「こども環境サミット」へのイタリア並びにEU圏からの参加を呼びかけた。2日間で3種類のシンポジウムを実施し、愛知万博の理念継承として「ボランティア・市民活動」について古澤礼太氏(中部大学中部高等学術研究所/国際ESDセンター准教授・中部ESD拠点事務局長)が愛知万博10年の歩みとESD活動を報告、現在も市民活動を続けているメンバーたちの愛知からのビデオメッセージを届けた。

弊法人の活動理念に即したパフォーマンスとしては、豊かな自然の営みに抱かれて四季を愛で神仏を敬う独自の文化を育んできた日本人の心を、神宮式年遷宮・盆栽・俳句・唱歌・折り紙などを通して紹介し、自然との共生を伝統とする日本文化の魅力と国際協力の役割について発表し、参加者と意見交換した。

## 実施プログラム報告

### 1. パネルディスカッション

今世紀の万博開催地である愛知、上海、ミラノの代表者を中心に3つのテーマでパネルディスカッションを実施した。

- 1) 愛知万博からみる万博市民参加の変遷と21世紀の国際博覧会の役割
- 2) 長江流域生物多様性保全活動「こども環境サミット」(上海崇明島)に向けて
- 3) 21世紀万博開催地・愛知、上海、ミラノ、そして未来へのメッセージ

## 2. ステージ・パフォーマンス

日本の伝統文化であり欧米でも人気の「盆栽」デモンストレーションを実施した。文化庁文化交流使として世界各地で盆栽を指導した平尾成志による「盆栽」デモンストレーションは2日間とも好評で多くのイタリア市民が来場し、ステージ上でのワークショップも志願者が多く、ミラノの芸大生らの熱心な質疑応答もあり交流を深めた。

- 1) 盆栽師・平尾成志による「盆栽」デモンストレーションとワークショップ
- 2) 名古屋二期会オペラ歌手・夏目久子が、ピアニスト・都築彩子の伴奏で『麦の歌』『八十八夜』など「食」に因んだ「日本の歌」を披露。「おてもやん」では観客も一緒に手拍子で楽しんだ。京都在住の伊豆蔵明彦氏デザインの藍色のドレスが、白いステージと赤色の日本のロゴマークに調和し舞台が華いだ。

## 3. ギャラリースペース「写真展示」

「丹沢の鹿から人類への警鐘」 写真・木村正夫

神奈川県丹沢山地は都心から 50km しか離れていないが、ブナやモミの天然林、シカやクマなどの大型野生動物、深い溪谷など豊かな自然が残された観光名勝地である。シカは保護動物として増え過ぎ、森林が枯れ農村被害が多発する一方で、人間による産業廃棄物の不法投棄も後を絶たない。近年、国内森林の生態バランスが崩れ、生物多様性の保全と再生など人間の居住区における「野生動植物の管理と森林整備の一体化」が求められている。森林現場で起きている喫緊の課題について写真家・木村正夫が警鐘を鳴らす。

木村正夫

1938 年笠間市箱田生まれ。神奈川県伊勢原市在住。祖父は日本画家の木村武山（きむらぶざん）、父は日本画家の木村武夫。東京藝大美術学部中退後、1957 年に日本天然色映画株式会社に入社。1998 年同社を退社後、ネイチャーカメラマンに転向。1970 年ニューヨークでクリオ賞受賞。2011 年～朝日新聞社主催「日本の自然コンテスト」入賞多数。

## 4. 映像上映

信州伊那の田園風景と日本人の美意識の原点ともいえる「俳句」をテーマに俳人・井上井月を題材とした映画「ほかいびと」の短編。弊法人名「ときの羽根」の命名由来（神宮の宝刀である「須賀利御太刀」（すがりのおんたち）の柄に朱鷺の尾羽根を 2 枚使用）でもある「式年遷宮」の映像。蚕と野草を育てて糸を染め織った天然素材の布を自然界に放つような独特の色・デザインでアートを創作する伊豆蔵明彦の世界。丹沢の鹿を通して人間社会と動植物の共生の課題に向き合うテーマを問いかける映像など、自然を慈しみ自然と共生する日本の精神文化の紹介と、弊法人事務所所在地の愛知県一宮市の七

夕祭り・モーニングサービスの紹介や中部北陸地区のインバウンドを狙った「昇龍道プロジェクト」の観光名所を異邦人の視点で撮った写真映像。日本の武士道精神をダンスパフォーマンスで見事に表現した「The Samurai」。助成先の日本企業・団体の環境保全活動に対する海外支援事例などを映像で紹介。

- 1) 第62回神宮式年遷宮 (Compilation of the 62<sup>nd</sup> Jingu Shikinen sengu Ritual / 伊勢市)
- 2) 映画「ほかいびと」(The Drifter Seigetsu, the Hiku Poet of Ina)短編 (監督・北村 皆雄 / ヴィジュアルフォークロア)
- 3) 伊豆蔵明彦の世界「自然と人いろ、いと、かたち」(Akihiko Izukura's World)
- 4) 丹沢の鹿から人類への警鐘 (写真・木村正夫)
- 5) 一宮モーニング&第60回一宮七夕祭り (一宮市・一宮商工会議所)
- 6) 日本の四季「昇龍道の名所100選」(写真・遼河)
- 7) 武士道「The Samurai」(M.Mishiro Dance Company / 監修・坂本久美子)
- 8) 日本企業・団体の国際協力事例 (トヨタ環境活動助成プログラム、経団連自然保護協議会、JST さくらサイエンスプランほか)
- 9) 夏目久子客員教授の音楽指導による名古屋文化短期大学の授業風景

## 5. 帰国後の感想

昨年末に採択通知を頂き、本年正月明けからの始動で5月中旬の開催まで準備期間が短く日本館事務局の関係者の皆様にご指導頂き実施することができた。現地入りしてから材料調達に奔走し、本番前日夜に発行されたスタッフパスの手続きや夜を徹しての設営や機材の搬入・搬出では、会場ディレクターの皆様にご助け頂き無事に終了することができた。

万博への公式参加という未経験のプレッシャーがあったが、日本館総合プロデューサーの福井氏、メディア総合プロデューサーの武井氏の貴重なアドバイスや博報堂プロダクツの長井氏らイベント広場ディレクターの方々のご親切なサポートを得て、計画したプログラムを微修正しながら全て実施することができた。印象的だったことは、盆栽師・平尾成志氏のパフォーマンスで盆栽が完成した直後に、日本館の加藤辰也代表がステージに上がって即興で平尾氏とトークをして下さり、日本館イベント広場全体が格調高い雰囲気にも包まれた一時である。(盆栽では男性スタッフ全員が東京都墨田区イキジの和モダンなTシャツを着用)

シンポジウムでは、弊法人代表の久田治子の挨拶に続き、理事の足立幸治による「ときの羽根」の活動報告をPPTを使って紹介。司会進行の藤井敏夫氏(中部国際空港連絡鉄道(株)専務・元愛知県環境部長)のバトンタッチし、マルコ・インペラドーリ氏(ミラノ工科大学教授)、梁晋氏(四川省国際科学技術合作協会会長・元中国駐名古屋総領事館領事)、李建華氏(同済大学環境科学与工程学院教授・JETRO中国環境顧問)、古澤礼太氏(中部大学中部高等学術研究所/国際ESDセンター准教授・中部ESD拠点事務局長)と、現地コーディネ

ーターの NPO 日伊文化協会みらい代表・吉田友香子氏の通訳により、「ミラノから未来へ」をメインテーマに 3 種類のシンポジウムを実施し、イタリアのみならず生物多様性保全活動や文化・芸術交流面でアジアと EU 圏との交流・連携に向けた 1 ページを開くことができた。

愛知万博、上海万博をきっかけに上海市と困難な環境の中で連携を続けた共通実績として国際博覧会参加の成果を真摯に受け止め、改めてご支援・ご協力頂いた皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

尚、弊法人の久田治子は、日本館公式サポーターに認定頂き、感謝申し上げるとともに帰国後もミラノ万博日本館で発表される様々なプログラムの成功を願い、万博参加メンバーとともに報告会はじめ各種ミラノ万博関連の企画催事のお手伝いをさせて頂く所存です。

「ミラノから未来へ」、ミラノ万博は地球上全ての生物多様性の素晴らしさをパビリオンを巡り、来場者と触れ合って認識する学習の場であると実感しました。

以上